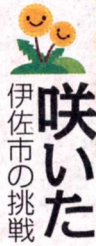


たんぽぽ



咲いた

伊佐市の挑戦

②

生まれた時から支援

「保健師なんて大嫌い」
二十数年前、鹿児島市で開かれた療育の勉強会。会場に響いた憤りの声に、まだ20歳代の新米保健師だった満田智子さん(53)は思わず身をすくめた。

満田さんは看護学校を卒業後、「就職したくない」という理由で保健師養成学校に進学。1981年、大口市(現・伊佐市)の保健師になった。受験者は一人。「でもしか先生」ならぬ「でもしか保健師」だった。

乳幼児健診を担当し、「何か気になる子ども」を数多く見た。でも、「何か」が分からない。母親から相談を受けても、「様子を見ましよう」でやり過ごした。



たんぽぽのスタッフから子どもたちの様子を聞く大迫さん

自分の未熟さが身にしみた。「何か」の答えを求めて勉強会に通い始めた。

*

「保健師なんて大嫌い」と言い放ったのは、鹿児島子ども療育センターの大迫より子園長(58)。乳幼児健診で、早

「絶対に変わる」情熱の二人三脚

期療育が必要な子どもを見逃す保健師が許せなかった。

元小学校講師。障害児を受け持つ中で、早期療育の重要性を痛感した。「生まれた時からしっかり支援したら、子どもは絶対に変わる。お母さんたちの涙を笑顔に変えてやる」。84年、0歳からの療育を実践する「あすなろ療育相談室」を開設。県内の早期療育の先駆者となった。

勉強会が終わり、おじけづく満田さんに代わって先輩保健師が声を掛けた。「大迫先生、大口に来てくれませんか」
91年2月、月1回の親子教室が始まった。無表情だった子どもが、大迫さんと遊び始めた途端、満面の笑みを浮かべる。母親たちは「初めて笑

顔を見た」と驚いた。

早期療育への期待が高まった。満田さんは「お母さんたちが声を上げないと」と背中を押した。「毎日通える療育の場を」。母親たちの声が行政を動かし、97年4月に「たんぽぽ」が誕生した。園児9人。「力強く、たくましく、かわいらしいタンポポのように」。母親たちが願いを込めて命名した。

*

26日、大迫さんの姿がたんぽぽにあった。この日は大迫さんによる療育指導。療育の様子を見守り、時には手本を示す。「スーパーパー」
という立場で、たんぽぽ全般の指導、助言を続ける。満田さんはたんぽぽを担当する市福祉事務所子育て支援係長になった。
変わらぬ情熱。21年目を迎えた二人三脚がたんぽぽを支える。